

手紙を活用した作文指導

自分の思いを伝える文章を書いたことがあるか

今までに自分の思いを相手に伝える手紙を本気で書いたことがある生徒はどのくらいいるでしょうか。ほとんどの生徒にそのような経験はないのではないのでしょうか。中には、手紙そのものを書いたことがない生徒も多いことでしょう。

従来行われてきた国語の授業では、作文を書く学習は行っても、世の中に出て直接役立つような実践的な「手紙の書き方」の学習は、ほとんどなされてきませんでした。この学習は、不可欠なものであるにもかかわらず、今までは行われてきませんでした。その分、読解学習や生活文の指導に傾いていたと言えます。これからは、この傾きを修正する必要があります。

手紙は、話すことと違い、いつまでも形として残るものです。中学生のうちに一度でもいいから自分の思いを本気で伝える手紙を書いてみる経験をさせたいところです。

どんな思いをだれに伝えるのか

(1) 思いを伝えるには手紙がよい

相手意識をもって手紙を書くことは、人と人とのかかわりを学ぶ大切な機会の一つとなります。思いを込めた手紙を書くとき、相手の立場を思いやる意識が育つでしょう。同じ内容を伝える文章でも、相手によって表現の仕方が変わる場合があります。異なる相手、異なる目的を想定して文章を書くことで、相手意識・目的意識を育てる授業ができるのではないのでしょうか。

手紙を書く学習のねらいは、「書くこと」の領域を中心に、自分の考えをもち、または、自分の考えをもてるように、目的や場面などに応じて適切に表現する能力を育成することにあります。手紙を書く学習では、書式や様式を模倣したり、一方的に発信したりするのではなく、相手や目的、場面に応じて、自分の思いや考え、用件などを双方向的に通じ合わせたり、両者の課題を解決したりできるような伝え合う力を育成することが肝要です。

(2) チャンスを逃さずに

自分の思いを伝える手紙を書いた経験がない生徒に、学習の場だけを設定し書かせようとしてもむずかしいと思われます。相手意識と目的意識を強くもたせ、自分の思いを相手に伝わりやすくするためには、学習の時期が重要になってきます。

今回の実践では、7月上旬を学習に最適な時期としてとらえました。なぜなら、この時期は、次のようなタイミングにあたるからです。

- 「職場体験活動」が終了した直後である。
- 部活動では、3年生が抜けて新体制がスタートしている。
- 2年生になり、新しい学級になって友達もできてきている。

(3) 何に感動したのか

今回の学習の一番のポイントは、「何に感動したのか」ということを明らかにすることです。これができれば、あとはいかに表現するかの問題です。生徒のつまずきの要因として挙げられるのは、以下の2点です。

- 自分で何に感動しているのかが自覚できていない。自分にとっての感動体験の意義、価値、豊かさ、深さを認識していない。
- 感動したことをどう表現したらいいのかが分からない。

感動（気持ち）の強さは言葉となって表れます。そこで、今回は「職場体験」「部活動」「友人関係」等を題材として学習の場を設定することにしました。